

5. おわりに

分野横断と文理融合

石川正弘 [都市科学シンポジウム実行委員会委員長]

第5回都市科学シンポジウムのテーマは「都市を複眼的に思考する」です。このテーマに至る背景を話します。少し時間をさかのぼります。2021年度春学期早々に学部長の藤掛洋子先生から開発人類学に関する授業で南極調査の話をしてもらえませんかとお願ひされました。他分野の授業で話すことは面白そうと思い引き受けました。藤掛先生は純粹に南極調査の話の話を聞きたかったのだと思います。地球科学が私の専門分野であり、人や社会を研究対象としたことはありません。地球科学者が開発人類学者である藤掛先生と授業でどのようにコラボできるのか興味がわきました。

私はこれまで5回ほど南極観測隊に参加しています。出発前の観測隊の訓練では南極における野外行動のリスクと対策についてレクチャーを受けることは定番です。ですから、南極大陸という極限環境における野外行動のリスクと対策の話の準備にとりかかりました。授業当日、藤掛先生がパラグアイのスラムについて現地インタビューの動画を見せながら受講生に話をしました。ひとくくりでフィールドワークといっても、開発人類学のフィールドワークは私のフィールドワークとはまったく違いました。南極大陸のフィールドワークでは悪天候やクレバスに調査が阻まれますが、インタビューの場合、まずはスラムの人々との繋がりを構築することから始めないと本質は引き出せません。人間関係の構築からはじめる開発人類学のフィールドワークは、これはこれで大変な道のりだなと思いました。正直なところ、藤掛先生の講義を聞くまでは、社会系のフィールドワークは天候の影響が少なそうなので、それほどハードではないという勝手なイメージを持っていました。私の経験上一番過酷だったのは、南極大陸で冷たい風に吹き曝されながら無数のクレバスが走る氷河をスノ

ーモービルで横断するときでした。強風を避ける場所もない南極氷床の上で氷河横断に2週間を費やし、体重が10kg減少するほどでした。南極のフィールドワークは過酷な一面があります。こんな経験から、社会系のフィールドワークに対する私の勝手な思い込みがあり、自然系と社会系のフィールドワークの間にアンコンシャス・バイアスを築いていました。長い時間をかけて人の心を開いていく藤掛先生のフィールドワークを見て、そんな自分が恥ずかしく思えてきました。藤掛先生の話について、私は南極大陸のきれいな風景と南極調査の危険(クレバス対策など)についてスライドを用いて紹介しました。さらに、南極のような過酷な自然環境で行動すると人はしばしば自己中心的な判断(日本の日常ならまずありえない判断)をすることなども紹介しました。話しながら「何か違うな」と自分自身で感じていました。「リスク」という言葉に引っ張られて南極調査の話がネガティブな方にどうしても比重が大きくなっていました。調査に対する意欲や情熱をもっともっと話せばよかったと授業後に思いました。

藤掛先生の話を書きいてスラムのイメージが実際と違いました。私が「スラム」と聞くと、「危険」、「不衛生」、「貧困」というネガティブなイメージしか浮かばなかったのですが、藤掛先生の話を知ると「笑顔」、「意欲」、「ポジティブ思考」というスラムの人々のプラスの面が見えてきました。スラムに対する勝手な思い込みは、一種のアンコンシャス・バイアスかもしれません。スラムの人々をネガティブな視点で見れば「危険」、「不衛生」、「貧困」しか見えませんが、スラムの人々をポジティブな視点で見れば「笑顔」、「意欲」、「ポジティブ思考」という面も見えてきます。藤掛先生の多面的な視点から見たスラム、非常に興味深かったです。南極調査のリスクと対策について話しながら「何か違うな」と自分自身で感じていたことは、多面的な視点の欠如でした。同一対象でも多面的な視点を持つことで、それまで見えてなかったものが見えることの重要性に改めて気づかされました。これがシンポジウムテーマの「複眼的思考」につながっていきます。藤掛先生の授業に一度参加しただけでも、自分自身の自然系と社会系のアンコンシャス・バイアスに気づいた件もあり、分野横断や文理融合には様々なアンコンシャス・バイアスを取り除く必要性を感じました。教員も学生も分野を

超えてもっともっと交流すると都市科学部は盛り上がっていくと思いました。私自身、藤掛先生の授業に参加したことで、地球上の都市・社会・環境に関心が拡大するきっかけになりました。余談ですが、これがきっかけで2022年度5月開催の日本地球惑星科学連合において「人新世の地球システム論：環境・都市・社会」のセッションを提案するに至りました。

先の講義から日にちが経過した2021年7月初旬、藤掛学部長から第5回都市科学シンポジウムの企画実行を打診されました。私がシンポジウムを企画する立場になるのであれば、分野横断そして文理融合を念頭において、学科を超えた教員と学生のインタラクティブな交流を目指したいと思いました。それが参加者各自のアンコンシャス・バイアスを取り除ききっかけになるからです。藤掛先生がスラム研究で行っている「複眼的な視点」を都市科学にも拡張するという意識を実行委員会で共有し、最終的には第5回都市科学シンポジウムのテーマを「都市を複眼的に思考する」とすることを実行委員会で決定しました。また、第一部のテーマを「複眼的思考から読み解くパラグアイのスラム：コミュニティ・国家・南米大陸」とし藤掛先生に話題提供いただくことにしました。パネリストは分野横断という意味で各学科教員から1名ずつ選出することを決め、建築学科の松本先生、都市基盤学科の田中先生、都市社会共生学科の三浦先生にご参加いただき、司会進行の私も環境リスク共生学科教員として議論に加わることにしました。第一部では、学生がよりインタラクティブに参加できるようにアプリSlidoで質問を共有しました。アプリSlidoは学生実行委員からの提案でした。パネルディスカッション後に学生実行委員の入江さんが参加者からの質問を紹介し、藤掛先生とパネリストの先生方が回答する形式としました。

第二部は都市科学部生の取り組みを発信・共有する場にするにしました。都市科学シンポジウム実行委員会を7月中旬に立ち上げ、学生実行委員3名(都市社会共生学科の入江さん、環境リスク共生学科の猪俣さん、都市社会共生学科の田名さん)にも加わってもらいました。学生実行委員の声を聴いて浮かび上がってきたことは、1年生向けに開講する〈都市科学A・B・C〉を終えると他学科の学生と交流する機会が少なくなっているということ、

そして2年生以上になっても学科横断的にもっと交流したいということでした。都市科学部において所属学科以外でどんな取り組みや研究が行われているのかをお互い理解することを目的として、第二部では学科横断的交流そして学年を超えた交流を目指すことにしました。今後のコロナの状況が不明なこともあり、シンポジウムをオンライン限定で開催することを2月に決定としました。学生実行委員が複数検討した上で、参加のしやすいSpatialChatで第二部を実施することを決めました。そして第二部の企画・実行・発表は学生を中心とする方向性も決めました。シンポジウム当日、第二部を足早に見回りましたが、予想以上に盛り上がっていました。むしろ、時間が足りなかったという印象を持ちました。第一部を午前で開催して、第二部は午後時間に時間を長く設定すると良いかもしれません。第二部の発表の中には全く人が集まっていないプレゼンもあり、参加者の関心にすでにバイアスがかかっていると感じました。芸術文化は人の心に作用しますので、都市科学においてさらに広く分野融合するためには、芸術文化をもっと取り込める仕組みが必要だったと感じました。懇親会は私の工夫がなく、もっとアイデアを広く募集すればよかったと反省しています。

裏話となります。週初めに接続テストなどを行っていましたが、第一部の開始直前にYouTubeライブの接続トラブルが発生しましたが、下出先生が必死に解決してくれました。下出先生はパソコン3台でZoomウェビナとYouTubeライブとパワポの制御を同時に行っていただきました。第二部では学生実行委員の猪俣さんがSpatialChatでの進行を見事に制御してくれました。第一部と第二部について、都市管理係の永田さんが各業者と調整して全て手はずを整えてくれました。学生・職員・教員が一体となり企画実行できたシンポジウムであったと感じています。シンポジウム終了後に樽沼先生から頂いた言葉「学生・事務・教員が一体となった三位一体のシンポジウムでした」という言葉がまさに今回のシンポジウムを表しています。参加していただいた皆様、発表者の皆様、実行委員ならびに関連の教職員の皆様には、この場を借りて、感謝申し上げます。